

日本旧石器学会

ニュースレター 第4号

NEWS LETTER No.4
JAPANESE PALAEOLOGICAL RESEARCH ASSOCIATION

特別寄稿

最近の愛鷹山麓旧石器時代調査状況

—第二東名関連を中心に—

笹原芳郎 ((財)静岡県埋蔵文化財調査研究所)

静岡県東部の第二東名高速道路は、愛鷹山南麓中腹、標高約 100 ~ 300m の位置で、山頂から放射状に延びる緩やかな尾根を横に断ち切るように計画されている。その大部分は掘削されるため、発掘調査は自ずと愛鷹山南麓に東西の大きなトレンチを入れたような結果となった。これまでの愛鷹山南麓の調査は、広域運動公園や工業団地の建設に伴うものであったため、山麓の部分的な調査であったが、第二東名高速道路の調査によって、山麓の西端から東端までの状況を知る機会ともなった。

1995 年の静岡県考古学会シンポジウム『愛鷹・箱根山麓の旧石器時代編年』以来、愛鷹・箱根の旧石器時代研究の課題の一つは、その初源についてであった。特に、愛鷹上部ローム最下層である第Ⅶ黒色帯から出土している資料が非常に断片的であり、人工品であるかどうか判断に迷うものも含まれていた。それが、元野遺跡（第二東名 No.19 地点）の調査で、第Ⅶ黒色帯から明確な剥離痕を有する富士川系ホルンフェルス为主体とした石器群が検出されると、第Ⅶ黒色帯の文化層が確実視されることとなった。その後、第二東名 No.25 地点にて富士川系ホルンフェルス製の礫器状の石器と剥片からなる、まとまった石器群が出土した。つづけて、隣接する第二東名 No.26 地点や No.27 地点からも同様な石器群が出土したことから、第Ⅶ黒色帯の石器群は礫器状の石器と剥片類からなるものと思われた。

ところが、梅の木沢遺跡（第二東名 No.143-2 地点）の調査で、柏峠産と思われる黒曜石およびガラス質

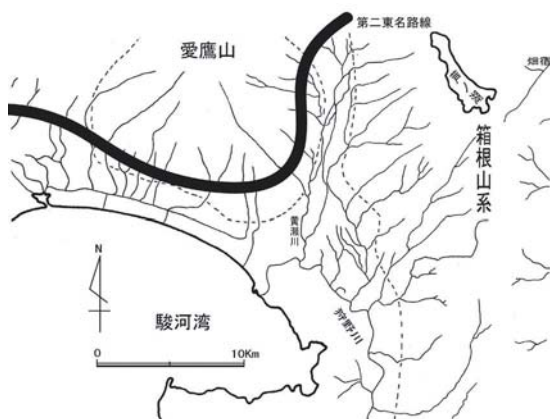


図1 愛鷹・箱根山系と第二東名路線の位置

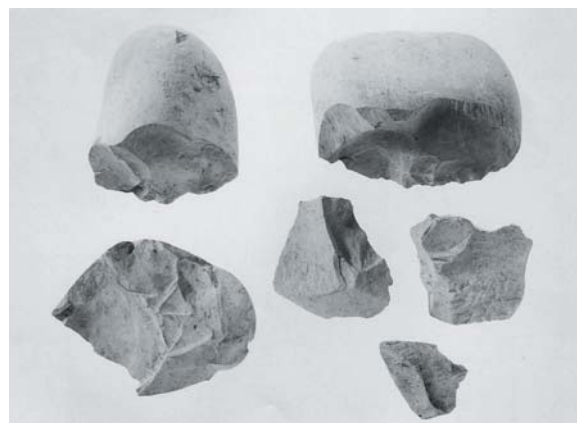


写真1 第二東名 No.25 地点遺跡出土石器

黒色安山岩製の剥片類と凝灰岩製、敲打成形の石斧状の石器が第Ⅶ黒色帯相当層から検出されると、局部磨製石斧類と台形様石器を特徴とする愛鷹・箱根第1期との関連も考えられるようになってきた。さらに、富士石遺跡（第二東名 No.142 地点）の同層から黒曜石製台形様石器を含む石器群が出土し、これら第Ⅶ黒色帯内の石器群が愛鷹・箱根第1期であることがほぼ確実となった。しかしながら、富士石遺跡の石器群と、第二東名 No.25 地点等の富士川系ホルンフェルス製の礫器状の石器と大型剥片を主体とする石器群と比較すれば、礫器類の有無や剥片剥離技術と作出される剥片類等に差異があると思われ、武蔵野Ⅹ層や相模野B5層のチャート製石器群の問題と同じく、同時期異相と一概に言えるかどうかは今後の検討課題である。なお、第二東名 No.26 地点の石器出土地点近くから採取した第Ⅶ黒色帯中炭化物のAMS法C14年代（暦年未校正）は、 $32,060 \pm 170\text{yrBP}$ (IAAA-10714) である。

愛鷹・箱根第1期の資料は、中見代I遺跡以降、第Ⅴ黒色帯を主体に数多く検出され、土手上遺跡においては黒曜石原産地推定全点分析の端緒となった。第二東名関連においても、梅の木沢遺跡第Ⅴ黒色帯相当層から環状ブロック群と考えられる石器分布が検出され、その石器ブロックの一つから、局部磨製石斧が破砕した状況で集積して出土した。当初、石斧の製作跡かと思われたが、接合の結果、6個体の石斧になることが判明した。局部磨製石斧が破砕された状況で出土する例は、沼津市西洞遺跡でもみられるので、当期に特徴的なあり方かもしれない。また、愛鷹・箱根第1期の石斧は、ほぼ全て凝灰岩質であることも注意すべきかもしれない。なお、梅の木沢遺跡の石斧集積地点の第Ⅴ黒色帯相当層から出土した炭化物のAMS法C14年代（暦年未校正）は、 $29,590 \pm 300\text{yrBP}$ (Beta-156809) である。

愛鷹・箱根山麓の石刃技法が出現するのは、第Ⅲスコリア帯黒色帯2からである。第二東名関連調査が始まる以前は、ナイフ形石器や単品の石刃等からその存在を認識していたが、向田A遺跡（第二東名 No.140）から良好な接合資料が得られた。稜付石刃もみられ、この時期に石刃技法が確立していたことがわかる。

1987年、鈴木敏中・前嶋秀張によって三島市初音ヶ原A遺跡で初めて検出された、陥し穴と推定される土坑群は、しばらく箱根山麓のみの存在であった。その後、愛鷹山麓においても1998年の長泉町鉄平遺跡での検出を皮切りに、第二東名 No.27-1 地点、細尾遺跡（第二東名 No.141 地点）、第二東名 No.28 地点、東野遺跡（第二東名 No.143 地点）、塚松遺跡（第二東名 No.144 地点）と次々に発見されるようになった。これらのことから、この土坑群は箱根・愛鷹山麓には普遍的に存在することが予想される。基本的には、尾根を横断するタイプと傾斜のゆるやかな谷を横断するタイプがあり、標高を上下移動するものに対しての施設であることは間違いない。現在、総数で186基になるが、その全てが第Ⅲ黒色帯内に掘り込み面をもつと考えられる。箱根・愛鷹山麓以外では、横須賀市長井台地遺跡群のみ類例があり、愛鷹・箱根第2期、相模野（諏訪間）編年段階Ⅲという限られた時期の、太平洋沿岸の限られた地域に分布するという事実は、この遺構群の用途を考える上で示唆的である。初音ヶ原遺跡群と下原遺跡において、同じ尾根上の標高差のある別地点に存在することが確認されているが、さらにおおきく標高差をもって愛鷹・箱根全域に広がっているか、いないか、今後の調査に期待したい。

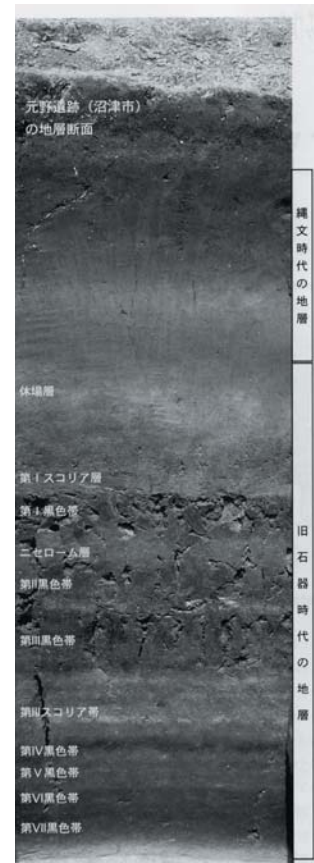


写真2 愛鷹・箱根山麓の基本層序

箱根・愛鷹山麓で陥し穴状土坑群と並んで多出する遺構として、炉址状遺構が知られている。近年では、ニセ・ローム層（AT 含有）中位から配石と掘こみをもつ炉址状遺構が向田 A 遺跡（第二東名 No.140）で 2 基見つかっている。類例は三島市観音洞 G 遺跡第 I 黒色帯下位から検出されている。遺構の形態も同じことから、AT 降灰後の特徴的な遺構となるかもしれない。向田 A 遺跡の炉址状遺構の掘り込みには焼土が残っており、炉としての機能を考えてよいと思われる。休場遺跡で見られた石囲炉状遺構と類似する遺構も、向田 A 遺跡（第二東名 No.140）と銭神遺跡（第二東名 No.27 - 2 地点）の休場層内から検出されている。休場遺跡では野岳・休場型細石核の時期だが、向田 A 遺跡では「砂川期」と思われるナイフ形石器群に、銭神遺跡では小型槍先形尖頭器と小型ナイフ形石器を伴っている。函南町柳沢 C 遺跡や長泉町野台遺跡では、「砂川期」あるいはそれ以降の時期とされるので、この石囲炉状の遺構は「砂川期」から野岳・休場型細石核の時期に存続したといえる。なお、休場遺跡では灰と焼土が明瞭に観察されたとのことであるが、それ以外の遺跡では、炭化物粒が分布するのみで、炉としての機能を積極的に推せる証拠は少ない。今後、炉以外の機能や、更新世火山灰土壌内の還元作用等、検討の必要がある。

さらに休場層からは、富士石遺跡で装飾品が出土している。層位は休場層内にある三層のスコリア層の上から 2 番目（YLs2）のやや上位、休場中層下位である。立地は埋没谷の谷頭部分にあたり、やや特殊な出土状況であるが、通常の石器ブロック内からの出土で、土坑等の痕跡はない。装飾品は中央やや片寄りに円形の穿孔があり、垂飾の形態をしている。法量は長さ 91.2mm、幅 35mm、厚さ 15.1mm、重さ 56.7g。緻密な白色流紋岩質の板状円礫を素材としている。片側側面には線状の線刻が 14 ケ所観察され、内 9 ケ所は表裏に及んでいる。反対側の側面は長軸に沿って研磨され、平坦となっている。伴出した石器は、小型槍先形尖頭器 1 点と端部加工ナイフ形石器 1 点、一側縁加工ナイフ形石器（欠損）1 点、ノッチ 1 点、削器 1 点、石刃 1 点である。石器群の内容および出土層位から、出土品は愛鷹・箱根旧石器時代編年第 4 期後半に位置付けられる。日本旧石器時代の装飾品では明確な意匠がある例が非常に希少であり、時期が限定される点においても重要である。

以上、現地調査から判明している第二東名関連の成果を、把握できていることのみ羅列して記述した。ほとんどの遺跡は、筆者が担当者ではないので、間違いや思い込みの部分が多々あるかと思う。今後、多量の資料を整理し、報告書を作成していくことになるので、多くの方々のご教授、ご鞭撻をお願いいたします。

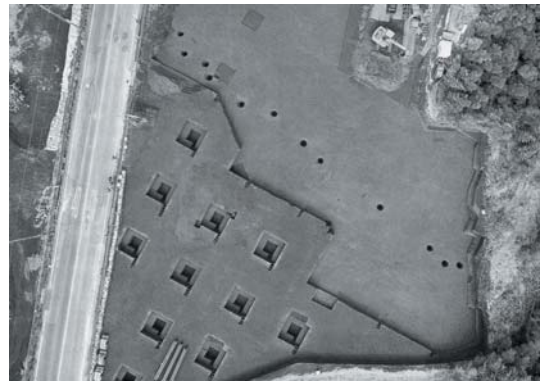


写真 3 富士石遺跡の陥し穴群

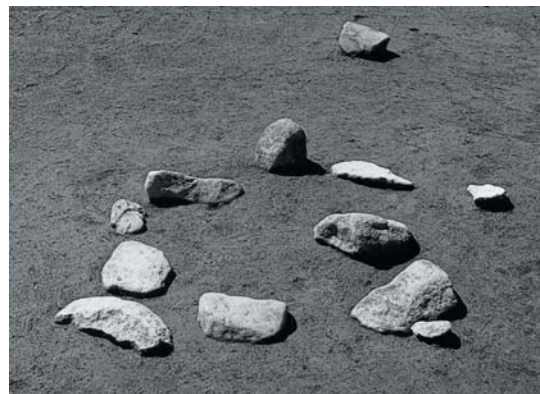


写真 4 向田 A 遺跡の炉址状遺構



写真 5 富士石遺跡出土の装飾品

役員選挙のお知らせ

日本旧石器学会の役員選挙告示

2005年9月28日

立候補者・推薦者各位

日本旧石器学会選挙管理委員会
委員長 西井幸雄

日本旧石器学会会則6・7条および役員・会計
監査委員・顧問選出規定により、下記のとおり、
役員選挙を実施いたします。

つきましては役員選挙で立候補・推薦を行う場
合、広報原稿作成については、下記により作成方
お願いします。

記

1. 立候補者・候補者推薦の受付

立候補者および候補者推薦は、別記様式により、
2005年10月31日(月)まで日本旧石器学会選
挙管理委員会(〒470-0195 愛知県日進市岩崎
町阿良池12 愛知学院大学文学部歴史学科白石
研究室 日本旧石器学会事務局)に届け出てく
ださい。その折に広報に掲載する原稿は100字
以内で書いて(立候補者または推薦者のいずれか
の原稿執筆が可)お送りください。

2. 選挙公報・投票用紙

11月中旬に発送します。

3. 投票期間

12月1日(木)～12月20日(火)とします。

4. 役員の決定

投票の結果、得票数の上位23位までを役員と
します。ただし北海道、東北、関東、中部、近畿、
中四国、九州7地区の上位得票者から役員1名
を選出し、他15名を上位得票者数によって役員
とします。辞退者がいる場合は順次繰り上げとな
ります。

5. 被選挙権のない会員

現委員23名は全員改選の対象になりますが、
現役員を含めた会員に被選挙権があります。

2005年9月28日

会員各位

日本旧石器学会選挙管理委員会
委員長 西井幸雄

日本旧石器学会の役員選挙にかかわる公報の原稿 作成について(依頼)

役員選挙における公報の原稿については下記に
より、作成方お願い致します。

記

1. 記載方法 A4版左詰め横書き10.5ポイン
トまたはペン書きをお願いします。なお、ペン書
きはワープロ原稿にして公示します。

1. 推薦候補 ①役員候補者名、②推薦内容、
③推薦者氏名

2. 立候補 ①役員立候補者名、②自薦内容
②の内容については100字以内でお願いします。

2. 送付方法 推薦候補の場合は本人の承諾はも
ちろんのこと、推薦者のサインと押印が必要です。
また立候補の場合は上記記載により、メールの添
付ファイルで送付も可です。

3. 原稿締切 2005年10月31日(月)
送付先

〒470-0195 愛知県日進市岩崎町阿良池12
愛知学院大学文学部 白石浩之
アドレス hshira@dpc.aichi-gakuin.ac.jp

日本旧石器学会役員選挙日程(案)

2005年

9月 ニュースレター刊行

役員選挙について掲載、選挙管理委員会
の組織、選挙公報への方法、公示日を11
月15日とする。

ニュースレター発送(郵送料)

10月31日(月) 選挙公報掲載原稿の締め切り

11月中 役員候補者を掲載した選挙公報と投
票用紙を各会員に送付(80円切手を貼
った返信用封筒を同封)。

12月1日(木)～12月20日(火) 選挙期間、

22日の消印をもって締め切り。

2006年

1月 選挙管理委員会による開票

2月 ニュースレターに選挙結果報告(郵送料)

6月 部会・総会にて選挙管理委員長報告・最終決定

第3回日本旧石器学会報告

2005年6月25日(土)、6月26日(日)に東京都明治大学・リバティタワーにおいて、第3回日本旧石器学会が開催され、記念講演、研究発表、ならびにシンポジウム「環状集落—その機能と展開をめぐる」が行われた。

1日目は韓国朝鮮大学校李起吉氏による記念講演「韓国の旧石器時代について—西南部地区を中心として」から始まった。講演では李氏が主要な研究フィールドとしている 流域の主要遺跡の概要を紹介したのち、利用石材、剥片剥離技術、石器組成、遺構、立地、地質、理化学年代などの面から後期旧石器時代の様相について総括された。次いで、研究発表に移り、「山形県高島町日向洞窟遺跡西地区出土縄文時代草創期石器群の再検討(1)」(発表者鈴木雅)、「武蔵野台地の後期旧石器時代遺跡」(発表者比田井民子)、「明治大学調布付属校用地試掘・確認調査の成果」(発表者野口敦)の3本が発表された。

次いで、シンポジウムに移り、2日目の午前



討 論 会

にかけて基調報告が行われた。前半は各地の環状ブロック群検出遺跡あるいは同時期の集落遺跡の事例報告で、栃木上林遺跡(出居博)、長野県日向林遺跡(谷和隆)、板井寺ヶ谷遺跡(山口卓也)、西日本の様相(藤野次史)の4本の基調報告が行われた。後半は環状ブロック群の総括的な集落論、行動論、集団・社会論などの視点からの研究報告で、環状ユニット(環状ブロック群)と石斧の様相(橋本勝雄)、環状集落をめぐる地域行動論(佐藤宏之)、環状ブロック集落の意味(稲田孝司)、旧石器時代の集落構成(安蒜政雄)の4本の基調報告がなされた。

2日目の午後から2時間半あまりにわたり討論会が行われた。まず最初に司会者から「環状集落」を読み解くためのキーワードを発表に即した形で提示し解説することが各発表者に求められ、各発表者の視点が明らかされた。その上で、「環状集落」形成の背景、「環状集落」の居住システム、「環状集落」消滅の背景の3つのテーマに絞って議論された。第1のテーマでは、「環状集落」を構成した集団、「環状集落」と石斧の関係、石斧の機能論などについて議論された。次いで、会場から動物解体と石斧の機能(小野昭)、環状ブロック群の構造(小菅将夫)、縄文時代集落研究などから見た分析視点など(池谷信之)についてコメントが行われた。コメントの内容も踏まえながら、第2のテーマでは、「環状集落」形成期の社会構造、「環状集落」の地域的偏在性などについて議論された。第3のテーマでは、「環状集落」消滅の背景について、社会・集団関係、生態環境などの観点から議論された。討論会では、後期旧石器時代前半期～後半期社会の歴史認識が深められるとともに、「環状集落」研究の課題が整理され、今後の研究に向けて多くの成果が共有された。

なお、1日目のシンポジウム終了後に、会場に隣接した明治大学アカデミーコモン地階ロビーにおいてポスター・セッションが行われ、4本の発表があった。

2003 - 2005 年度活動報告

2003 - 2004 年度および 2004 - 2005 年度前半期の活動概要について報告する。なお、2003 - 2004 年度についてはニュースレター第 3 号にすでに報告しているので、詳細はそちらを参照されたい。

総務委員会 2003 - 2004 年度は 4 回の役員会議、新期会員勧誘、第 2 回総会等の開催準備などを行った。2004 - 2005 年度は、2 回の役員会議の準備、第 3 回研究発表・シンポジウムなどの開催準備を行った。2005 年 6 月 25・26 日に明治大学において開催された第 3 回総会の調整事務を行った。役員改選の日本旧石器学会選挙管理委員会を立ち上げ、役員会承認ののち、西井幸雄、織笠明子、亀田直美の 3 名に選挙管理委員会委員を依頼し、承諾された。これに基づき、準備を選挙管理委員と進めている。また、ニュースレターなどの送付事務を行った。

会誌委員会 2003 - 2004 年度は会誌の名称や構成内容、投稿規定・執筆要綱の原案を作成した。原稿応募を 2004 年 7 月に締切り、第 1 号編集作業に入るとともに、査読の依頼などを行った。2004 - 2005 年度は、引き続き解し第 1 号の編集作業を行い、6 月 25 日の総会にあわせて発行した。当初、論文 5 本の予定であったが、査読の結果、1 篇は修正提出期限までに未提出、1 篇は編集スケジュールに間に合わないことから第 2 号へ掲載変更、1 篇は総説に変更することとなり、最終的に論文 2 篇となった。本年度は引き続き会誌第 2 号を発行する予定であり、原稿の締切りは 2005 年 9 月 30 日で、2006 年 5 月 10 日発刊予定である。会員諸氏の積極的な投稿をお願いしたい。また、第 3 回シンポジウムの特集を予定している。

ニュースレター委員会 2003 - 2004 年度はニュースレター 1 号・2 号を発行した。2004

- 2005 年度は 1 月にニュースレター 3 号を発行した。第 3 号では、最近の国内外の調査事例として、中国泥河湾の前期旧石器時代遺跡の調査概要について泥河湾猿人観察所衛奇氏に依頼するとともに第 2 回総会、シンポジウムの報告、2003 - 2004 年度の活動報告を行った。本年度は、第 3 号に続いて、第 4 号（本号）を 9 月、第 5 号を 2006 年 3 月に発行の予定である。今後、ニュースレターを会員の意見交換の場としても活用したいと考えている。さまざまな意見を委員会までお寄せいただきたい。

安蒜 (ambiru@mbb.nifty.com)

藤野 (tfujino@nifty.ne.jp)

渉外委員会 2003 - 2004 年度は中国、韓国、ロシアの関係機関、関係者への日本旧石器学会設立の挨拶状の送付、韓国、中国で開催されたシンポジウムに委員ほか参加し、ロシア・ノヴォシビルスクで小野渉外委員長が、関係者と東アジア旧石器学会設立に関する意見交換、情報収集を行った。2004 - 2005 年度は 2003 年の発起人会に提出された素案を参考に国際的な研究交流や東アジア旧石器学会を運営する際の問題点などを文章化し、日本側のガイドライン作成を具体化を模索したい。また、海外の国際会議・シンポジウムなどの情報の収集しニュースレターを通じて会員に広く伝達したい。これに関連して 8 月にロシア・アルタイ山地で開かれた国際シンポに参加した際、稲田孝司、佐藤宏之、小野昭と韓国研究者 4 名で、今後の交流について話し合い、韓国旧石器学会の紹介記事をニュースレターに書いてもらい、逆に日本旧石器学会の紹介記事を韓国とロシアに送ることを相互に内諾した。

研究企画委員会 2003 - 2004 年度は第 2 回シンポジウム「石刃技法と石材環境」企画原案の作成、開催準備ならびに当日の運営を行った。

2004 - 2005 年度は第 3 回大会の研究発表（一般研究・遺跡調査報告）の募集、シンポジウム「環状集落—その機能と展開をめぐっ

て」の企画原案を作成をし、役員会の承認を経た後、開催準備（発表依頼、シンポジウム予稿集の編集・刊行）ならびに当日（2005年6月25・26日）の運営を行った。また、記念講演を韓国の李起吉先生に行っていた。なお、当日はポスターセッションを併せて行い、その準備運営を行った。

データベース委員会 2003 - 2004年度は、データベースのフォーマット原案作成や都道府県責任者の選出などを行い、都道府県責任者ならびに各県分担者に作成依頼状を送付した。2004 - 2005年度は各県で作成されたデータ（提出期限2005年9月30日）を基に順次データベースを構築していく予定である。

会計委員会 第2回総会に2003 - 2004年度決算報告ならびに2004 - 2005年度予算を提出し、承認された。2004 - 2005年度はニュースレター3号、会誌第1号関連の予算執行、第2回・第3回研究発表シンポジウム要旨の印刷費の予算執行を行った。1年半を1年分の会費でまかなうため非常に厳しい予算となっている。会費の完納、新期会員の獲得、シンポジウム発表要旨・会誌の販売などにつとめ、会計の安定化を計る必要がある。

国内関連学会の動向

2005年に国内で開催または開催予定の関連学会のうち主なものについて紹介する。

1月～9月

県指定文化財上尾市殿山遺跡シンポジウム「石器が語る2万年」

開催日 2月13日（土）

開催場所 埼玉県上尾市

主催 埼玉県考古学会・上尾市教育委員会

ミニシンポジウム「立川ローム層下部の層序と石器群」

開催日 3月12日（土）

開催場所 明治大学リパティタワー

主催 明治大学校地内遺跡調査団

東京大学公開シンポジウム「旧石器時代の地域編年とその比較」

開催日 5月4日（土）・5月5日（日）

開催場所 東京大学文学部

長野県旧石器文化研究交流会（第17回）

開催日 6月18日（土）・19日（日）

開催場所 竹佐中原遺跡発掘現場（18日）

飯田市鼎文化センター（19日）

テーマ 竹佐中原遺跡をめぐる諸問題

石器原産地研究会（第6回）

開催日 7月2日（土）・3日（日）

開催場所 長崎県大瀬戸町ふれあい工芸館

テーマ 九州各地の縄文時代の石斧づくりとデポ
遺構

津南町の旧石器時代研究の現状と課題 ～特に杉久保石器群を中心として～

開催日 7月2日（土）

開催場所 新潟県津南町総合センター

中・四国旧石器文化談話会（第22回）

開催日 9月17日（土）・18日（日）

開催場所 島根県埋蔵文化財センター

テーマ 島根県における旧石器文化の様相

10月～12月

石器文化研究会20周年記念シンポジウム

開催日 10月1日（土）・2日（日）

開催場所 横浜市神奈川県民センター

テーマ 「ナイフ形石器文化終末期」再考—ナイフ
形石器文化終末期石器群の変動—

第I部 列島各地

第II部 隣接地域と南関東、第III部 南関東

問合先 石器文化研究会事務局（三瓶裕司、
touroku@sekki.sakura.ne.jp）藤沢市辻堂西海岸

2-6-4-506 三瓶裕司宛

岩宿フォーラム・シンポジウム

開催日 11月5日（土）・6日（日）

開催場所 群馬県笠懸町笠懸町公民館

テーマ 石器石材Ⅲ—在地系石材としてのチャート

問合先 笠懸野岩宿文化資料館

TEL0277-76-1701 FAX0277-76-1703

k3-edu@kasakakemachi-gnm.ed.jp

九州旧石器研究会（第31回）

開催日 11月19日（土）・20日（日）

開催場所 宮崎市宮崎県総合博物館県民文化ホール

テーマ 南九州の旧石器—最近の調査成果から—

問合先 宮崎大会実行委員会 事務局（担当：松本茂）
宮崎県埋蔵文化財センター（宮崎郡佐土原町大字下那珂 4019）TEL0985 - 36 - 1172 / FAX0985 - 72 - 0660

東北日本の旧石器文化を語る会

開催日 11月26日（土）・27日（日）

開催場所 北海道大学（26日）・（財）北海道埋蔵文化財センター（27日）※27日はセンターで白滝遺跡を中心とする資料見学の予定

鹿児島大学総合研究博物館第10回研究交流会

開催日 12月3日（土）

開催場所 鹿児島大学郡元キャンパス総合教育研究棟 201号室

テーマ 黒潮を渡った旧石器時代の人びと

問合先 鹿児島大学総合研究博物館（鹿児島市郡元 1-21-30 橋本達也）電話 099-285-7548

海外関連学会の動向

渉外委員会から寄せられた情報をもとに海外の関連学会開催情報を以下に紹介する。

The Indo-Pacific Prehistory Association(IPPA) の国際会議がフィリピン大学を会場に 2006年3月20日～26日に開催の予定で、日本からも黒曜石研究 成果報告が何本か行われる予定である。詳細は、<http://arts.anu.edu.au/arcworld/ippa/ippa.htm> を参照。

ネアンデルタール人骨発見 150周年記念国際シンポジウムがドイツのボン大学を会場に 2006年7月21日～26日に開催予定である。その他にも博物館で特別展の開催が予定され、世界各地から人類化石のオリジナルが展示されるとのことである。詳細は、http://www.neanderthal.uni-bonn.de/kongress_bonnindex.htm を参照。

お知らせ

新入会員について

ニュースレター第1号発行後に以下の方々が本会に入会されました。

阿子島香、石川日出志、大谷薫、小田静夫、海部陽介、加藤学、工藤雄一郎、芝康次郎、関口博幸、関口昌和、仲田大人、山科哲、山田しょう

委員会委員の嘱託について

これまで1年9ヶ月の活動を続けて参りましたが、当初予想していた以上に各委員会の仕事量が多く、人的な補充が必要な部署があることから、会則第5条に基づき、若干名の委員を委嘱することに致しました。

総務委員会：川合剛

会誌委員会：藤田尚

データベース委員会：砂田佳弘、光石鳴巳

ニュースレター委員会：谷和隆

ニュースレター委員会からのお願い

皆様の様々なお意見や情報などお寄せください。適宜、ニュースレターに掲載し、会の意見交換の場にしていきたいと思っております。

日本旧石器学会ニュースレター
第4号

2005年9月30日発行

編集：日本旧石器学会ニュースレター委員会
安蒜政雄・藤野次史

発行：日本旧石器学会

事務局：愛知学院大学文学部白石研究室

〒470-0195 愛知県日進市岩崎町阿良池12

電話 05617-3-1111～8（内線3247）

E-mail hshira@dpc.aichi-gakuin.ac.jp